

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】(2ユニット/ユニット1)

事業所番号	2774600650		
法人名	有限会社 介護センターかがやき		
事業所名	グループホーム かがやき		
所在地	大阪府柏原市上市三丁目13番16号		
自己評価作成日	令和4年2月24日	評価結果市町村受理日	令和4年4月13日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ニッポン・アクティブライフ・クラブ ナルク福祉調査センター		
所在地	大阪府中央区常盤町2-1-8 FGビル大阪 4階		
訪問調査日	令和4年3月25日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当事業所では介護を必要とされるご利用者様お一人おひとりの思いに沿ったケアの実現を心がけています。健康管理につきましては、主治医や看護師、薬剤師の助言のもと細心の注意を払いケアにあたっています。ケアにあたる職員につきましては、幅広い年代の考え方、感じ方、意見の相違がある時は適宜各フロア会議を開催しケアの方向性を統一し情報共有に努めています。ホームとして、ご家族様が気軽に立ち寄れてなんでも相談できるようなアットホームな雰囲気づくりを目指しています。共用フロアは広々とした明るい空間で、催し物も屋内で楽しんで頂いています。畑や花壇が敷地内にあり、季節ごとに野菜や果物を収穫することによって季節が感じられ気分転換が図られるようなスペースになっています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業主体は1999年に設立され、2004年に当事業所を開設し、同敷地内に通所介護・訪問介護の各施設を併設している。事業所理念に沿って、アットホームな雰囲気作りに努め、利用者がマイペースで自宅に居るような生活を過ごせるよう支援している。玄関や各フロアの入口は施錠せず、利用者は自由に行き来でき、様々なレクリエーションと一緒に楽しみ、家事仕事得意な人にはどんどんお願いし、畑・庭・花壇の世話もしてもらっている。良好な医療連携体制を構築し、日常的な医療はもとより、ターミナルケアや看取り介護の研修を実施して数多くの看取りを経験し、利用者・家族の安心と信頼を得ている。従来は、地域との付き合い、運営会議の開催、馴染みの関係継続の支援、日常的な外出支援なども充実していたが、コロナ禍でまもなく、早期の終息が待たれる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「家庭的な雰囲気の中で家事や趣味を通じ、住み慣れた自然の多い町で共同生活を楽しむ」を理念とし、常に勤務中も見える場所に掲示している。	事業所の理念は、2階入り口と1階・2階のフロア内の目に付く所に掲示して、利用者・家族・職員に周知している。家庭的な雰囲気作りに努め、利用者にマイペースで過ごしてもらおう心掛けている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	年に一度、施設の敷地を地域の祭りの休憩所として開放し、地域の方々や家族様に参加していただき楽しんで頂いていた。ホーム発行の新聞や回覧板などで周知して頂いていたが、コロナ禍でここ2年は行なえていない。	自治会に加入し、回覧板で地域の行事などの情報を得ている。以前は、中学生の職場体験や各種ボランティア(歌体操・ハンドベル・踊りなど)の受け入れ、事業所の秋祭りへの招待などで地域の人達と交流していたが、コロナ禍のため全て中止している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	近隣の中学校と連携を図り、職業体験などの受入れを実施し、認知症についての理解を得られるよう努めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	ホーム内での取り組みなどを見ていただき、意見を拝聴し、サービス向上に活かしていたが、令和2年3月以降は開催が中止されている。	コロナ禍のため、令和2年3月以降は会議を中止し、書面開催としている。利用状況やヒヤリハット・行事の報告書を、会議メンバーの市職員と地域包括支援センター職員に送付している。	地域密着型介護施設としてサービス向上を図るために、運営推進会議は重要な場である。コロナ禍終息が見通せず会議開催が難しい中でも、できるだけ詳しい運営報告書をメンバーと全家族に送付して文書で意見収集し、その内容と事業所の対応を含めた議事録を送付して実効を上げることが望む。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市役所が近いこともあり、月に数回足を運び、情報提供や報告・相談を行ない協力関係を築くよう取り組んでいる。イベント等がある時は立ち寄っている。市から委託を受けた介護相談員が2か月に1回事業所を訪問し、利用者の生活の様子を聴き取ってくれていた。	市の高齢介護課とは各種書類の提出や介護保険制度改定の問い合わせなどで、福祉総務課とは生活保護受給者の書類提出などで、健康づくり課とはコロナ対策などで関係している。介護相談員の訪問や市グループホーム事業所従業者部会への参加はコロナ禍で中止となっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束防止マニュアルを活用し、所内研修の実施に努めている。	「大阪府身体拘束ゼロ推進標準マニュアル」と事業所の「身体拘束排除マニュアル」を整備している。回覧による研修を実施し、ユニット会議で拘束事例やスピーチロックなどについて話し合い、拘束の無いケアに努めている。玄関・エレベーターや各フロアの入口はロックせず、利用者は自由に行き来できる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	ヒヤリハット報告書を活用し、朝夕の申し送りの時間を利用して意見交換を行ない、防止の徹底に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者が中心に理解を深め、職員に詳しく伝えて学んでいる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約前に施設見学をして頂き、十分時間をとって家族間での話し合いをお願いしている。契約・解約時には、丁寧に説明を行ない質疑等に納得されるまでお答えしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議への参加を呼びかけ希望者に出席して頂き意見を伺い反映できるよう取り組んでいる。苦情相談窓口及び担当者を設置している。	電話連絡時や差し入れ時、介護計画作成時などに家族の意見を聞き、随時申し送りノートに記録して職員間で共有している。コロナ禍で本年1月から再度面会を中止しているが、事業所便りを毎月家族に送付し、利用者の様子を写真で知らせている。家族に要望に沿って、コロナワクチン接種の情報は逐一家族に伝えている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎日、朝夕の申し送り時間を利用し職員同士意見交換をする機会を設けている。管理者は職員一人一人に声かけを行なっている。	管理者は日常的に職員の意見を聞くよう心掛けている。フロア毎の毎月のユニット会議や、毎日の朝夕の申し送り時に職員の意見・提案を聞き、代表者も随時会議に参加して聞いている。利用者のケアに関する意見は多いが、運営に関する意見は余り無い。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	仕事にやりがいを感じ責任を持って働けるよう適材適所役割分担している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	個人の力量に応じた外部研修などの情報を職員向けに掲示している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	柏原市グループホーム事業所（従業者部会）に参加し交流を図り情報・意見交換等を行なっている。		
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に自宅・施設・病院等に職員が訪問し本人や家族・ケアマネジャー等から聞き取りを行なっている。入居前に施設見学をして頂き、設備や環境を説明し意見や感想を伺っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前後に出来る限り多く施設へ来て頂き、家族の思いを聴き要望に応じられるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居時にまず何を必要とされているか利用者・家族と話し合い、福祉用具利用等他のサービス利用の必要性を検討している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員と入居者は共同生活者であるという認識を持つよう日々啓発している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族が気軽に職員と話ができるようなアットホームな雰囲気を作り、職員と家族が一緒になって本人を支えていく関係作りに努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人の友人やご近所さんが気軽に来て頂けるよう声かけしている。	入居時に利用者・家族から聞いた馴染みの関係はフェイスシートに記入し、入居後は日誌などに記入し職員間で共有している。介護計画に「長年馴染んだ生活や好み」を記載し、ケアに活かしている。コロナ禍で馴染みの関係継続は難しいが、元職員が利用者と将棋を指しに訪問したり、電話や手紙のやり取りを支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者の性格、利用者同士の相性などを考慮し食席等の配置を行なっている。職員は積極的にコミュニケーションをはかり孤立しないような環境作りを行なっている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後も家族から要望があれば相談に乗り心配事が払拭できるよう支援している。		
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人・家族の思いや希望を丁寧に聴き取り、あるいは察知して把握するよう努めている。意思表示ができない場合は、本人の立場に立ってその思いをくみとるよう努力している。	入居時のフェイスシートや、日々の日誌・申し送りノートに利用者の希望・意向を記入し、職員間で共有している。介護計画に「好きなこと・したいこと・嫌いなこと・したくないこと」などを記載し、ケアに活かしている。利用者の希望に沿って、ジグソーパズルを職員が持参したり、うな重や豚まんを提供したりして喜ばれている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ケアマネジャーに情報提供書の提出を求めこれまでのサービス利用の経過を把握する一方で、家族に馴染みの暮らし等について把握できるよう話を聞き取っている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員は毎日、一人ひとりの介護支援経過記録に丁寧にその日の過ごし方、バイタルサイン、気持ちの変化等を記入して現状の把握に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人・家族の生活に対する意向を伺い、必要に応じて主治医の意見も取り入れて現状に即した介護計画を作成している。	毎日の支援経過記録・日誌やモニタリング(3か月～1年)などを基に、利用者・家族の意向も取り入れて、3か月～1年の目標を設定し介護計画を作成している。本人(随時)・家族・ケアマネジャー(兼管理者)・職員が参加してサービス担当者会議を開き、3か月～1年毎に計画を見直している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日の支援経過記録、日誌に様子やケアの実践を記入し朝夕の引継ぎ時に情報共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	同敷地内には、ヘルパーステーション・デイサービスがあるので、それぞれのアイデアを取り入れサービスの多機能化に取り組んでいる。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	消防訓練では消防署と運営推進会議では民生委員と職業体験受入れでは中学生と協働して本人が安全で豊かな暮らしを楽しめるよう支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	全利用者が事業所のかかりつけ医の内科診療を受けている。かかりつけ医が専門科受診が必要と判断した時は紹介状を書き家族に受診同行をお願いしている。また、本人・家族が希望する医療機関を受診できるようにも支援している。	事業所のかかりつけ医は大阪市内に居るが、24時間いつでも対応してくれる。全利用者が週1回内科診察を受けており、体調の変化にも直ぐ対応してくれるという安心感から利用している。歯の治療が必要な時には、歯科医師会から歯科医を紹介してもらっている。他科は、必要に応じてかかりつけ医から紹介を受け受診している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回の訪問看護師来訪時には本人の一週間の心身の状況を正確に伝えている。その情報はその日のうちに主治医に伝えられる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院当日に介護サマリ・薬情報・介護保険証写し等をMSWに直接手渡すかFAXで情報提供している。入院中はMSWから病状報告を受け、退院に向けて調整を行なっている。各病院関係者とは顔なじみの関係を構築している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合における対応に係る指針を整備している。重度化した場合の対応について医師や看護師、家族、事業所で十分話し合い、方針の統一を図っている。昨年1年間で3例の看取りを行なった。	入居の契約時に「重度化した場合における対応に係る指針」の説明を行い、終末期を迎えた時点で再度、事業所での看取りについて説明し同意を得ている。看取りに関する指針は定期的に見直し、令和4年3月に看取りに関する研修を行った。昨年度は3例の看取りの事例がある。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	消防署の協力で定期的に救急救命の実施指導を受けている。緊急時マニュアルと緊急連絡網を作成し、全職員に周知し目につく場所に掲示している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災や地震を想定した訓練を年2回、洪水や浸水を想定した避難訓練を年1回、利用者も参加して行なっている。火災が起こらないよう職員は十分に注意している。	「防災マニュアル」を作成し、地震・水害に関する内容を記載している。水や食料品・衛生用品などの備蓄品の内訳と消費期限などのリストの作成や保管場所など、不確かなことが多い。避難訓練は昼間の想定で実施しているが、夜間想定の実施ができていない。	夜間想定の実施が未実施のため、職員は夜間の火災時にどう対応するか不安を感じている。火事を発見した時の対処、利用者の誘導方法など、夜勤者皆が知らないという行動することができない。災害時の備蓄品も不十分で、最低3日分の保管は必須である。さらに綿密な災害対策を講じることを望む。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	接遇や個人情報保護に関する研修を定期的に行なっている。居室の出入りの際には利用者が居る居ないに関わらず必ず声かけしてから行なっている。トイレ誘導の際には他利用者に気づかれないよう配慮している。	接遇マナー・プライバシー保護に関する研修を実施している。利用者には馴れ馴れしい言葉や幼稚な言葉を使わない、言葉による制限をしないよう常に話し合っている。普段は居室入口に暖簾はかけていないが、利用者が臥床したり介助中には、他者の目に触れないよう長めの暖簾を掛け、プライバシーの保護に配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員は利用者の表情や仕草でその気持ちを推しはかり、本人が意思決定を表出しやすい雰囲気作りに努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者ファーストを心がけている。その時の心身の状態を見極め、臨機応変に対応できるよう職員一人ひとりが心がけている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	可能な利用者には朝の着替え時に、その日一日に着る服を選んでいただいている。月1回、訪問理美容に来てもらい、希望があればカット・顔剃り・毛染めを利用してもらっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	職員が調理中にその日のメニューを知らせ匂いなどを楽しんでもらっている。調理は職員が行ない、利用者は食材の皮むきや食前のテーブル拭きや食後の食器拭きなど出来ることを行なってもらっている。誕生日会にはケーキを作ったりお好み焼きを焼いたりして、食事が楽しみなものになるよう務めている。	専門の業者の献立に沿って食材が配達される。利用者は現存能力を活かしながら、野菜の皮を剥いたり、食器を拭いたり、職員と一緒に調理や片付けを行っている。コロナ禍で外食に行くことはできないが、季節のイベント食や、誕生日ケーキ・お好み焼きなどを作ったりして食事を楽しんでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養バランスを考慮した食材を業者から購入している。食事が取りにくい場合は食事形態の変更を試み、栄養確保に努めている。水分についてもお茶の他コーヒーや紅茶、スポーツドリンクなど個人の好みを考慮して水分量の確保に努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食物残渣が誤嚥を誘発する恐れがあるので毎食後、自分で出来る方には口腔ケアの声かけを行ない、介助が必要な方には口腔内清潔が保てるよう介助を行なっている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの排泄パターンを把握するため記録している。ソワソワするなど排泄サインを見極め、トイレに誘導し対応している。夜間は定期的に声かけを行ない、トイレ誘導かポータブルトイレ、尿器の利用を支援している。入居前より失禁が減った利用者が数名いる。	排泄チェック表を利用して利用者の排泄のタイミングを把握し、尿意を催した時の排泄サインを察知しトイレに誘導している。入居当時はリハビリパンツを着用していた利用者が、職員の介助を受けずに一人でトイレに行けるようになった事例がある。夜間は定期的に声掛けをして、排泄の失敗が無く気持ち良く過ごせるよう支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘予防に歩行や運動の機会を作っている。便秘を予測して牛乳や水分を多めに取って頂く対応を行なっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	基本的に1日3名ずつ午前中に入浴し、利用者は週2回入浴してもらっている。それ以外にも体調・タイミング・受診に合わせて入浴日や(シャワー浴・清拭・足浴等の)方法を臨機応変に変更している。	職員の体制を見ながら、日曜日でも入浴することがある。入浴の拒否があった場合は時間や曜日を替えて、入浴ができるよう対応している。気持ち良く浴槽に浸かれるよう、湯はその都度入れ替えている。女性の利用者が多く皆話好きなので、入浴中は普段よりも多く会話をして楽しんでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	利用者一人ひとりの生活習慣に合わせて居室やソファで休んで頂いている。明かりや空調は利用者に合わせて安心できる空間作りを行なっている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	医師が処方する薬のベネフィットとロス、用法用量を理解できるよう記録し情報共有している。服薬支援し服用後に変化がないか確認し記録している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家事仕事得意な方にはどんどんお願いする等一人ひとりの力を活かした役割を担ってもらっている。パズルが好きの方、ボール運動が得意な方などそれぞれの趣味にあった活動を支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	現状はコロナ禍で外出は行なえていない。昨年10月頃には敷地内の畑で栽培した農作物の水やりや収穫時に外気に触れる機会をつくっていた。	コロナ禍以前は利用者と一緒に外出していたが、事業所内で新型コロナウイルスの感染があったため、外出にはとても気を遣い、ほとんど敷地外に出ることはない。敷地内の畑の農作物へ水やりする、自販機の飲み物を買うに行く、ゴミや空き缶を捨てに行く、歩行練習をするなどして、できるだけ外気に触れるよう工夫している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理のできる利用者には、職員付き添いで自身の買物をして頂いている。希望する利用者にはカタログで好みのエプロンや靴を購入できる支援を行なっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者の希望があればいつでも電話を利用してもらっている。手紙を書く支援も行っており、年に数回手紙を出されている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者が不快感を持たないよう毎日トイレや共用空間の消毒清掃を行なっている。フロア内には季節が感じられるような装飾を施して居心地の良い共用空間づくりに取り組んでいる。	利用者は1日の大半を居間兼食堂で過ごし、調理時の野菜を切る音や煮物の臭い、大き過ぎないテレビや音楽の音、利用者と職員がゲームをしている笑い声など、生活の様子を肌で感じる。居間兼食堂は日当たりが良く、ベランダ側のガラス戸の前で日向ぼっこをしている利用者がいる。換気には十分気を付けている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	各所に多めにイスやソファを設置しており、気に入った場所で話ができるように配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室にはベッド、洗面台、エアコン、防火カーテンが設置され、床のカーペットは、利用者がケガをしないようクッション性の良いソフトなものを提供している。利用者の自宅で使い慣れた家具や椅子等を持参して頂き、落ち着いた雰囲気の中で居心地よく過ごせるよう配慮している。	事業所からベッドを提供されるが、利用者が気に入ったベッドを利用することもできる。洗面台・エアコン・カーテンは準備されているが、それ以外の物は利用者と家族で相談して持ち込み、居室は使い易いように工夫されている。利用者の居室に表札を付けることで分かり易くなったと、利用者から喜ばれている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	全体にバリアフリー化されており不要な段差等はなく、手すりを各所に設置している。各トイレに目じるし、各居室前には表札をかかげ分かりやすいように配慮している。		